

上方洒落本における罵りの助動詞（2）

－『月花余情』大坂板・江戸板を中心に－

村中 淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

A Study of Auxiliary Verbs of Cursing in Sharebon part2 : Focusing on “Gekka Yojo” Osaka Version and Edo Version

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

Key Words: Sharebon, Edo Period, Kansai Dialect, Translation between Dialects

要旨

上方板洒落本（『月花余情』とその続編）が江戸板洒落本に改作された際の、罵りの助動詞の改変状況を調べた。もともと使われていたクサルがそのまま使われたケースと、削除されたケースとがあり、新たに使われた罵りの助動詞はなかった。江戸板への改作においては、文法や語彙が東日本方言的に改変されている部分があるため、クサルに関する改変も、江戸を中心とした東日本の読者に向けてのもので、上方ふうの談話を避けたという可能性が考えられた。

1 はじめに

上方板洒落本（『月花余情』とその続編）が江戸板洒落本に改作された際、罵りの助動詞がどのように変えられたかに注目する。当時の罵りの助動詞の実態を探ることと、そこから上方語に関する考察を深めることを目的とする。

1-1 「月花余情」組について

近世の日本語を調べるための文字資料として、洒落本は重要である。国立国語研究所が作成した『日本語歴史コーパス』の「江戸時代編」においても、洒落本が取り上げられている。

洒落本は18世紀に盛んになり19世紀中ごろまで続いた小説の一種である。大部分は会話中心の文体で遊里の風俗を写實的に描いた短編小説である。

洒落本には、内容がよく似た作品がある。中でも注目すべきものとして、江戸板から上方板に改作されたもの、逆に上方板から江戸板に改作されたものがある。次の2組である²⁾。

- ・江戸板→上方板：『郭中奇譚』（1769）→『郭中奇譚（異本）』（1772）
（以下、矢野（1976）に倣って「郭中奇譚」組とよぶ。）
- ・上方板→江戸板：『月花余情』（1746）と続編『陽台遺編・舩閣秘言』（1750以前）→『月花余情（異本）』（1764-1771）
（以下、矢野（1976）に倣って「月花余情」組とよぶ。）

本稿筆者は、罵りの助動詞をテーマとして、近世以降のさまざまな日本語資料を用いた分析を進めている。洒落本については、江戸板が上方板に改作された「郭中奇譚」組を使った考察をおこなった（村中 2022）。本稿では、逆方向の改作、すなわち上方板が江戸板に改作された「月花余情」組を資料として、罵りの助動詞を見ていく。

「月花余情」組の上方板と江戸板の対応について、北崎（2015:1）の表に加筆したものが、表1である。加筆したのは舩閣秘言の中の区分け部分（～の段）である。

表1 「月花余情」組（北崎（2015）に加筆）

改作前（上方）		改作後（江戸）		
書名	部	書名	部	
月花余情	燕喜篇	月花余情 （異本）	燕喜篇	
陽台遺編・舩閣秘言	陽台遺編 秘戯篇		秘戯篇	
	舩閣秘言		置屋の段	自楽篇
			身仕廻部屋の段	
		浜の京屋身上り之段		

次に「月花余情」組のあらすじを述べる。上方板の後、江戸板について説明する。

「燕喜篇」では、遊郭に客（花情）が来て、中居や店の女房が賑やかに迎え、女郎（歌夕）が登場。店の亭主も挨拶。客に料理や酒を出す。芸妓が歌う。客が廁へ立った隙に、芸妓と女郎が互いの男の噂をする。ひとしきり遊んだ後、客は寝る。女郎と店の女房が、正月の衣装や客の来る日について打ち合わせをする。

「秘戯篇」は、女郎（歌夕）と中居（くめ）の会話で始まる。続いて、女郎と客の2人きりの会話。女郎が客に嫉妬したり気遣ったりする。客がくめを呼び、駕籠屋を呼んで客は帰る。くめと女郎の会話。女郎が気晴らしに出かけると言い、くめもついていく。行先は男（新さん）のところ。家の外から起こそうとするが男は出てこず、戻って飲んで寝る。

舩閣秘言の「置屋の段」では、小女郎たねが女郎の歌夕を起こす。女郎の花咲はすでに起きて風呂にも入り、食事中。歌夕も、風呂と食事を済ませる。置屋の女房のお熊が、皆に早く身仕舞いせよ、起きるのが遅いと愚痴る。「身仕廻部屋の段」は、女郎の花咲と歌夕の会話で始まる。歌夕はゆうべ男（新さん）に会えなかった話。花咲は客の悪口の後、自分の男の話。そこに使いが歌夕へ手紙を持ってくる。歌夕は手紙を読み上げ、手紙の主の悪口を言う。花咲がたしなめる。2人でお熊の悪口を言ったり、髪を整えたりする。お呼びがかからないので京屋と

いう店で飲もうと相談。「浜の京屋身上り之段」では、歌夕と花咲が京屋に来て飲食しながらお熊の悪口など話す。京屋の女房のつやが2人を宥めるように応対。

上方板は以上のように、ある置屋での2日間ほどの出来事を描いたものである³⁾。

江戸板の「燕喜篇」と「秘戯篇」は、上方板よりやや短くなっているが、内容の異同は少ない。人物は遊女が「かしく」、客が「花丈」という名になるが他の人物名は同じ。「自楽篇」の前半は、かなり手が加わっている。上方板の「置屋の段」のごく一部の内容のみが採用され、「身仕廻部屋の段」はお熊の悪口と京屋へ行く相談のみが採用される。そして新しくお熊のセリフと、下女たまと女郎たちとのやりとりが挿入される。その後の「浜の京屋身上り之段」にあたる部分は、ほぼそのままである。

1-2 「月花余情」組と「郭中奇譚」組に関する先行研究

「月花余情」組と「郭中奇譚」組という二組を挙げたのは、管見の限りでは、矢野(1976)が最初のものである。ほかに増井(1994)と北崎(2015)がある。

矢野(1976)は「江戸板洒落本の言語現象と相違している上方板洒落本の言語現象は当時の上方(の口頭)語を反映している可能性が大きい」と述べ、尊敬表現および一人称代名詞・二人称代名詞における相違点をあげている。「郭中奇譚」組においては、上方板において、敬語辞「シャル」と「ナンス」、「連用形+ネエ」形式の命令表現、「連用形+ンス」、遊女による一人称「ワッチ」が避けられていること、そのほか音便形や指定辞の違いを挙げている。「月花余情」組においては、江戸板で敬語辞「ナハル」「ナンス」が避けられたことを述べる。

増井(1994)は、「郭中奇譚」組の「掃臭夜話(掃臭夜帖)」の対応する本文を示し、矢野(1976)で言及されなかった言語表現の違いとして、「か→じやないかいな」、「ゑい→よい」、「こよふ→こふ」、「から→よつて」、「おめえ→おまへ」、「なさった→なんした」、「マツト→もつと」、「いった→いた」を指摘している(矢印の後ろが上方板の表現)。「月花余情」組については触れられていない。

北崎(2015)は、「月花余情」組と「郭中奇譚」組の江戸板・上方板について、対照コーパスの構築を試みたという報告である。対応箇所の例が挙げられ、タグをどのように付与したかの説明がなされている。改変の例としては「月花余情」組で「なはる→なさる」が16例あることと副詞「もう」が削除されていること、「郭中奇譚」組では「ばか→あほう」の例と「しゃる」が避けられる傾向とウ音便の例が挙げられている。

以上の通り、洒落本における上方板と江戸板の間の改変において、敬語表現は取り上げられてきたが、罵り表現は「ばか→あほう」のみであり、罵りの助動詞は取り上げられていない。

2 目的と方法

2-1 目的

上方板洒落本が江戸板洒落本に改作された際、罵りの助動詞がどのように変えられたかに注目し、当時の上方語に関する考察を深めることを目的とする。

改作にあたって、言葉遣いを変えるかどうかは、作品の筆者にとって考え所であろう。変えなくてもそのまま問題ない、あるいは変えた方が通じやすい、変えた方が読者にウケそうだ、あるいは部分的に削除してしまった方がすっきりして読みやすくなりそうだ、あるいは言葉を足して説明した方がよさそうだ、などのさまざまな思案が働くものと思われる。

改作にあたって行われた語彙の取り替えや削除・加筆の部分に注目することによって、「江戸らしさ」や「上方らしさ」が浮き彫りにされるのではないか。罵りの助動詞は、1-2で挙げた先行研究では言及されていなかったが、切り口のひとつとして有効だろうと予想している。

2-2 方法

洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』（1978-88 中央公論社）を用いて、上方板洒落本『月花余情』『陽台遺編・姍閣秘言』と江戸板洒落本『月花余情（異本）』の文章をそれぞれ確認する⁴⁾。上方板洒落本『月花余情』『陽台遺編・姍閣秘言』については、国立国語研究所が作成した『日本語歴史コーパス』に入っている⁵⁾ので、その検索結果も参考にする⁶⁾。

文章確認の後、次の3つの作業を行う。これは本稿第3章の3つの節にそれぞれ相当する。

- (1) 「月花余情」組（上方板から江戸板への改作）における罵りの助動詞の出現数を明らかにし、「郭中奇譚」組（江戸板から上方板への改作）と比較する。
- (2) 「月花余情」組における罵りの助動詞の出現した文脈について、詳しく見る。
- (3) 「月花余情」組における、罵りの助動詞に関する改作のありようについて考察する。

3 結果と考察

3-1 「月花余情」組と「郭中奇譚」組における罵りの助動詞の出現

「月花余情」組の罵りの助動詞の出現数を数え、村中（2022）の「郭中奇譚」組の罵りの助動詞の出現数と並べて示したのが表2である。コマス、サラス、ケツカル、クサル、ヤガル、アガルはいずれも罵りの意味を持つ助動詞である。コマスのみ、話し手の動作を表す動詞につく助動詞であり、他のものは聞き手もしくは第三者の動作を表す動詞につく助動詞である。

表2 「月花余情」組と「郭中奇譚」組の罵りの助動詞の出現数⁶⁾

	『月花余情』 『陽台遺編・姍閣秘言』	『月花余情』 (異本)』	『郭中奇譚』	『郭中奇譚』 (異本)』
	上方板 → 江戸板		江戸板 → 上方板	
コマス	0	0	0	3
サラス	0	0	0	2
ケツカル	0	0	0	2
クサル	6	3	0	1
ヤガル	0	0	6	0
アガル	0	0	0	1

「上方板→江戸板」の改作と「江戸板→上方板」の改作とでは、罵りの助動詞の出現の変化が全く異なることがわかる。「江戸板→上方板」の「郭中奇譚」組においては、改作前の江戸板ではヤガルしか使われていなかったが、改作後の上方板ではヤガルがゼロになり、その代わりに、コマス・サラス・ケツカル・クサル・アガルが使われている。一方、「上方板→江戸板」の「月花余情」組においては、改作後に出現数は減少しているものの、使われているのは同じクサルのみである（ここでは助動詞クサルを全て計上した。意味の違いについては後述）。

改作においては、改作後の読者として想定される地域の人々へより強く訴えかけようとする筆者の意図があったと仮定すると、上方板への改作において、さまざまな罵りの助動詞が新たに使われたことは、罵りの助動詞が上方の読者に強く訴えかけるための有効なツールの一つであったことを示唆すると推測される。一方、江戸板への改作においては、新たな罵りの助動詞は使われず、同一の罵りの助動詞が使われてはいるものの減少していることから、罵りの助動詞は江戸の人々に訴えかけるツールではなかった、と考えられる。

3-2 「月花余情」組における罵りの助動詞の出現文脈

以下、『月花余情』『陽台遺編・妣閣秘言』に出現した助動詞クサル6件の出現文脈を挙げ、それに対応する『月花余情（異本）』の文脈を<改作後>として並べる。改作後の『月花余情（異本）』に出現する罵りの助動詞3つは、全て改作前と同じ文脈に出現する。

クサル1, クサル2, の番号は、上方板における出現順に振った番号である。クサルを含む文節に を付す。用例の後ろの括弧内は、書名・部名と刊行年、『洒落本大成』における巻号とページである。文字表記はできるだけ『洒落本大成』と同じにしたが、読みやすさのため人物ごとに改行し、人物名の後にコロンを入れ、せりふの中に適宜スペースを入れた。

【クサル1】

<改作前>

客 : また少シ おきて 手てんがう

女郎: ア、何なんすぞいな こそばいわいな。ろくにねなんせ フウ/ \ / \ / \ / \ / \

客 : ねかへり

女郎: ア、こないに髪をそこのふて あしたいんだら わらひくさろ

客 : いやも いのわい。

女郎: マアよいわいな。 まだ八ツ過じやぞへ

(陽台遺編・妣閣秘言 秘戯篇 1750,3-21)

<改作後>

花 丈: 又すこし おもむきて 手てんがうする

かしく: 何なんすぞいな こそばいわいな。ろくにねなんせ 又いなね姿する フウ/ \ / \ / \ / \

花 丈: ねかへる

かしく: ア、こないに髪をそこなふて あしたいんだら わらひくさろ

花 丈: いやも いのわい

かしく: マアよいわいな また八ツ過じやぞへ

(月花余情 (異本) 秘戯篇 1764-1771,3-128)

この部分は、改作の前後の異同がごく少ない。クサルを含むセリフとその後のセリフは、仮名遣いを除けば同一であり、クサルの使われ方は、上方板と江戸板で共通する。

客と遊女の床入り場面で、客が遊女に手慰みのイタズラをして、遊女が「くすぐったい」と言い、寝返りを打った客に「ああこんなに髪型をダメにしてしまって、明日戻ったら、（皆が）笑うだろう」と、客のせいで髪型を崩されたことについて、文句を言っている。手慰みの後に寝返りを打った客は背中を向けていると思われるので、その客に向けて「こないに髪を」と言うのは、客の気を引いているとみえる。その後、客が「いやもう帰るよ」と言うのに対して遊女は引き止める風情である。この流れから見ると、「笑ひくさろ」は、笑われてしまうじゃないか、と客に文句を言いつつ媚態を示していると解することができるだろう。「笑ひくさろ」の語形そのものは「笑いやがるだろう」にあたるが、ここでは、ごく軽く罵っているだけのようである。

【クサル2】

<改作前>

客 : ヲイかごは いつもの所に おろしてたも
 駕籠 : ハイかしこまりました
 くめ : 仁兵衛どん 頼むぞや
 駕籠仁兵衛 : ヲイ心へました あとでどうこでまたびさしやれ
 くめ : かまいくさんな
 女郎 : 表のくゞり戸のきわで よふ御出なんした
 駕籠 : ハイ\\ \\ \\ \\ \\ \\

(陽台遺編・妯閤秘言 秘戯篇 1750,3-21)

<改作後>

花丈 : ヲイかごは いつもの所へ おろしてたも
 カゴ : アイかしこまりました
 くめ : 仁兵衛どん たのむそや
 かご仁兵衛 : ヲイ心得ました
 かしく : 表のくゞり戸のきわで よふ御出なんした
 かご : ハイ\\ \\ \\ \\ \\ \\

(月花余情(異本) 秘戯篇 1764-1771,3-129)

この部分も、改作の前後の異同は少ない。ただし、改作後には、駕籠屋の「あとでどうこでまたびさしやれ」とそれに続くくめの「かまいくさんな」のやりとりの部分のみ、まるごと削除されている。本筋とは関係のない瑣末な部分で不要と見做されて削除されたのであろう。

ここで問題となるのが「かまいくさんな」のクサルの意味である。その前の流れを見ると、くめは「仁兵衛どん 頼むぞや」と言い、駕籠屋は「ヲイ心へました」と答える、穏やかでありふれたやりとりである。そして次に駕籠屋は「～さしやれ」と丁寧なことばを使って勧めを行い、くめが「かまいくさんな」(かまわないでくれ)と応じている。この「かまいくさんな」は、『日本語歴史コーパス』では語彙素「腐る」(すなわち罵りの助動詞のクサル)で検索した時に出てくる例の1つなのだが、これは語彙素の付与が間違っているのではないかと思う。ここは罵りの助動詞「クサル(腐る)」ではなく、「くれる」の尊敬語で「くださる」という

ニュアンスの「クサル(呉さる)」なのではないか。つまり、このくめのセリフ「かまいくさんな」は、「かまいやがるな」ではなく、「おかまいくださるな」という丁寧なニュアンスではないかと思われる。

【クサル3, クサル4】

<改作前>

中橋筋の門のきわで

女郎： エ、もふ ねてゐるそうなわいな

くめ： そふほかいな。

女郎： エ、ついこゝにねてじやけれど どふもおこされはせず またんせ 砂ほつて見よ ばら／＼
／＼ エ、これでもおきくさらん

くめ： もうよしになんせ けつく内の首尾がわるか 新さんがわるからぞいな

女郎： サアそれおもふて 忽たゝかんわいな 歌 親はなけれど子はそだつ。よしおもはじと思へども。袖は涙に道はくれ エ、こないにいふても 馬の耳に風 ほんにかぜひいたそふな ハア くつさめ サアおくめどん。こんやはいの あたとんな こないにさむいめして来ても 何とも思ひくさるまい

くめ： サアどふで男といふものは。女子の思ふ程にはないものじやわいな

(陽台遺編・妯閤秘言 秘戯篇 1750,3-22)

<改作後>

中橋筋の門の際で

かしく： エ、もふ ねているそうなわいな

くめ： そうかいな。

かしく： ア、ついこゝにねてじやけれど どふもおこされはせず またんせ 砂ほつて見よ ハラ／＼
／＼ ア、是でも起くさらん

くめ： もうよしニなんせ けつく内のしゆびがわるか 新さんがわるからぞいな

かしく： サアそれおもふて 忽たゝかんわいな 歌 親はなけれど子はそだつ よしおもはじと思へども 袖はなみだに道はくれ エ、こないにいふても 馬のみゝに風 ほんに風引たそうな ハア、サアお久米どん 今夜はいのう あたとんな こないにさむいめして来ても 何とも思ひくさるまい

久米： サアどふで男といふもの 女のおもふほどにはないものじやわいな

(月花余情(異本) 秘戯篇 1764-1771,3-129,130)

ここも表記の違いはあるが文章の異同はごく少ない。「おきくさらん/起くさらん」は、女郎が自分の恋人を起こそうとして家の外から砂を投げてみたが起きない、と忌々しがるセリフである。「思ひくさるまい」は、女郎が自分の恋人について、「こんなに寒い思いをしてせつかくきたのに、(彼は)なんとも思わないのだろう」と忌々しがっている。つまり「起きやがらない」「思いやがらないだろう」と、女郎が男を罵ったニュアンスである。これに対して、女郎について来たくめは、男というものは薄情なものだと慰めている様子である。

【クサル5, クサル6】

<改作前>

花咲： 歌夕さん タベ 新さんにあいなんしたか

夕： いゝへ。タベも客を早ふ いなしてしまふやうに こつちから帯といて手廻したけれど。つい七ツまへになつて。それから かどへいて わめいたけれど。よふねていたわいな。あげくのはてニ 風引てのけた

花咲： ほんにおまへのは よくじやわいな。わしら此間ねツからあわぬ。そしてあたいやらしい。あの伊丹の客めが ねから夜があけにや。いにくさらん。そして夕べもぬかす事 聞てくだんせ。あのこのやうに あつかましよういふて。あすは身仕廻べやで。御そしりであるふとぬかしくさつた。それでわしがおもふには なんのおのれがこと 咄しせふと。心で思ふていたわいな。そしてマアおまへアノ 新さんと どふでもめうとになりなんすか。浦山しいことじやナア

夕： サイナ新さんもマアもつきなり わしももたるる氣じやけれど おやごさんが かたいそふなわいな。それでマアわしも 氣にかゝつて どふもならぬわいな

(陽台遺編・妯閨秘言 妯閨秘言(身仕廻部屋の段)1750,3-23)

<改作後>

丸ごと削除されており、対応箇所がない。

ここの2つのクサルは上方板にしかないものである。中野三敏のいう「客の帰った後の遊女の内幕の描写」であり、女郎同士の気の置けない会話場面である。歌夕が自分の男に関して愚痴ったのに対し、花咲が自分の客の悪口を言っている。

「いにくさらん」「ぬかしくさつた」のいずれも、女郎の花咲が客の動作にクサルを付けて言ったセリフである。花咲が客を罵る意図で発話していることは、「伊丹の客めが」と罵りの接尾辞メをつけたり、「話す」の罵り語であるヌカスを使って客の動作を表現したりしていることから明らかである。クサルを含む花咲のセリフ部分をそれぞれ現代語訳すると次のようになる。

[元の文]

あの伊丹の客めが ねから夜があけにや。いにくさらん。

[現代語訳]

あの伊丹の客めが(早く帰ってほしいのに)まったく夜が明けなければ帰りやがらない。

[元の文]

あすは身仕廻べやで。御そしりであるふとぬかしくさつた。それでわしがおもふには なんのおのれがこと 咄しせふと。心で思ふていたわいな。

[現代語訳]

(客が私に)明日は見仕廻べやで自分の悪口を言うだろう、と言いやがった。私は、なんであんたのことなど噂するものかと、心の中で思っていたよ。

1-1のあらすじの説明で述べた通り、改作に際して、「身仕廻部屋の段」は大幅に改変されている。歌夕と花咲の会話のうち、自分達の男に関する話と客の悪口がばっさりとカットされており、クサル5・クサル6の部分もそのカット部分に含まれる。少なくともこのケースでは、中野三敏のいう「客の帰った後の遊女の内幕の描写」が江戸板では簡略化され、ややあつさりした味わいのものになったと言えるだろう。

3-3 「月花余情」組における、上方板から江戸板への改作のありようについて

上方板洒落本（『月花余情』とその続編）が江戸板洒落本に改作された際の、罵りの助動詞の改変状況を見てきた。まとめると次の表3のようになる。

表3 クサル6件の使用と改変の状況

クサルの使用例	上方板			江戸板
	話者	動作主	聞き手	
クサル1 わらいくさる	女郎・歌夕	不特定	客	話者・動作主・聞き手とも 全て上方板と同じ
クサル2 かまいくさんな*	中居・くめ	駕籠屋・ 仁兵衛	駕籠屋・ 仁兵衛	なし（セリフが削除）
クサル3 起きくさらん	女郎・歌夕	新さん	中居・くめ	話者・動作主・聞き手とも 全て上方板と同じ
クサル4 思ひくさるまい	女郎・歌夕	新さん	中居・くめ	話者・動作主・聞き手とも 全て上方板と同じ
クサル5 いにくさらん	女郎・花咲	客	女郎・歌夕	なし（前後含めて削除）
クサル6 ぬかしくさつた	女郎・花咲	客	女郎・歌夕	なし（前後含めて削除）

* 「かまいくさんな」のクサルは「呉さる」の可能性が高い。

上方板から江戸板への改作にあたって、新たに使われた罵りの助動詞はなく、もともと使われていたクサルがそのまま使われたケースと、削除されたケースとがあった。江戸板への改作においては、文法や語彙が東日本方言的に改変されている部分があるため、クサルに関する改変も、江戸を中心とした東日本の読者に向けてのものと考えられる。

「呉さる」の可能性が高いクサル2を除くと、全て女郎が使用していた。クサル3・4・5・6のように、女郎が気のおけない同僚を聞き手として第三者を罵る使い方が主流だと考えられる。クサル3・4は自分の恋人を動作主としており、愛情混じりの忌々しさを表現する罵りのようである。クサル5・6は、腹立たしい客を動作主としており、他の罵り表現（接尾辞メヤ動詞ヌカス）と共に使われていることから、やや強めの罵りのようである。

クサル2はそれを含むやり取り（発話2つ分）だけが削除され、前後はそのまま残されている。瑣末で不要な部分と判断されて削除されたと思われる。

クサル5・6は、それを含む前後がごっそりと削除された。2つの可能性が考えられる。

(1) クサル5・6は、客を激しく罵っており、強く響きすぎるために削除された（それに対して、削除されなかったクサル3・4は、男についての愛情混じりの罵りである）。

(2) 「自楽編」における悪口を、置屋の女房お熊に対する悪口だけにまとめて、話の筋をスッキリさせるため、クサル5・6を含む前後が削除された。

いずれにしても改作者が上方ふうと捉えた部分を江戸ふうに変えた結果の削除ではないか。遊女同士の内緒話における強い罵りが上方ふうかもしれない。歌夕と花咲のそれぞれの男の話や、それぞれの客への悪口を並べたところがしつこい味わいで上方ふうかもしれない。3-1で述べたように、罵りの助動詞は江戸の人々に訴えかけるものでなかったことも削除の要因だろう。

クサル1・3・4は江戸板でもそのまま残された。村中(2022)の表1の通り、湯沢(1936)・湯沢(1954)や山崎(1963)・山崎(1990)によれば、近世において、クサルは上方地域のことばであって江戸地域のことばではなかったようだが、村中(2022)の表3で江戸板洒落本『南閨雑話』で使用が1例あったように⁷⁾、江戸でもクサルはヤガル等に置き換えなくても通じたようだ。

4 終わりに

何が上方ふうで何が江戸ふうであるかについては、さらなる検討が必要と思われる。

今後も上方を中心とした洒落本における罵りの助動詞について調べていきたい。

【注】

¹⁾ 国立国語研究所作成『日本語歴史コーパス』には奈良時代から明治・大正までの資料が収められ、「江戸時代編」には洒落本、人情本、近松浄瑠璃、随筆・紀行がある。洒落本は『洒落本大成』(1978-88 中央公論社)を底本とし、江戸板、大坂板、京都板が10作品ずつ入っている。

²⁾ 刊行年は、『洒落本大成』の解題を執筆した中野三敏に依って刊行年を示した北崎(2015)に従った。その結果、『歴史コーパス』掲載の刊行年よりも早い時期を示すことになった。なお、改作者はいずれも未詳である。

³⁾ 『月花余情』の解題で、中野三敏は次のように述べている。『『月花余情』と後編『陽台遺編』と『新月花余情』の三書を合せ見たとき、ようやく洒落本がその構成や描写において一つの完成期に入ったことを感じる。即ち遊里の情景描写から遊興の実態の会話文と小書衣装付による活写、さらに床入り後の痴話、あるいは客の帰った後の遊女の内幕の描写などの完成であり、(略)。つまり、上方板「月花余情」組の話のかたちは、その後の洒落本のパターンとして踏襲されていったものである。

⁴⁾ 上方板洒落本『月花余情』『陽台遺編・姦閣秘言』、江戸板洒落本『月花余情(異本)』はいずれも『洒落本大成』第3巻に入っている。

⁵⁾ 江戸板洒落本『月花余情(異本)』は『歴史コーパス』に入っていない。北崎勇帆(2015)によれば『月花余情(異本)』も含めた「月花余情」組および「郭中奇譚」組の作品群から東西対照コーパスが設計・構築されたようだが、そのコーパスは一般公開されていないようである。

⁶⁾ 村中(2022)の表3では『陽台遺編・姦閣秘言』のクサルの数を5としていた。村中(2022)では『日本語歴史コーパス』の検索を語彙素「腐る」でおこなっており、その結果、本稿で「クサル4」として示した例「思ひくさるまい」が出てこなかったのである。今回、『洒落本大

成』の文章を確認した際に、クサル4の例を発見した。再度確認のため『日本語歴史コーパス』を語彙素「呉さる」で検索したところ、この例が出てきた。

㊦『南閨雑話』の例は、江戸の遊女による使用例である。

【参考文献】

- 北崎勇帆, 2015, 「洒落本を対象とした東西対象コーパスの設計と構築」『情報処理学会研究報告』vol.2015-CH-106(5): 1-6.
- 国立国語研究所, 2022, 『日本語歴史コーパス』(中納言 2.6.1 データバージョン 2022.03) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search> (2022年9月5日確認) .
- 増井典夫, 1994, 「近世後期上方語研究の課題——近世後期名古屋方言を視野において」『淑徳国文』35: 47-64.
- 村中淑子, 2019, 「「穴さがし心の内そと」における罵り表現について——助動詞・補助動詞を中心に」『現象と秩序』10: 21-38.
- 村中淑子, 2020, 『関西方言における待遇表現の諸相』和泉書院.
- 村中淑子, 2021, 「明治・大正期の大阪落語資料にみる罵りの助動詞について」『現象と秩序』14: 45-63.
- 村中淑子, 2022, 「上方洒落本における罵りの助動詞——『郭中奇譚』(1772)を中心に」『現象と秩序』16: 69-86.
- 洒落本大成編集委員会(解題は中野三敏), 1979, 『洒落本大成』3, 中央公論社.
- 山崎久之, 1963, 『国語待遇表現体系の研究 近世編』武蔵野書院.
- 山崎久之, 1990, 『続国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院.
- 矢野準, 1976, 「近世後期京坂語に関する一考察——洒落本用語の写実性」『国語学』107: 16-33.
- 湯沢幸吉郎, 1936(1982再版), 『徳川時代言語の研究 上方篇』風間書房.
- 湯沢幸吉郎, 1954(1957増訂版参照), 『江戸言葉の研究』明治書院.

【編集後記】

『現象と秩序』第17号をお届けします。今号も刺激的な5本の論考が掲載されています。

第1論文は、「孤独死」の当事者についての考察から「当事者/宣言」を分析的な概念として再構成することを試みた意欲的な論考です。カテゴリーをめぐる問題の帰属先としての「当事者」、「問題」を可視化させるメカニズムとしての「宣言」というとらえ方は、当事者宣言の地平をさらに広げることが期待できます。

第2論文は、本誌16号掲載「上方洒落本における罵りの助動詞」の続編です。前号では江戸板から上方板へ改作された洒落本が、今号では上方板から江戸板へ改作された洒落本が検討されています。「江戸ふう」「上方ふう」の罵り言葉とはどんなものでしょうか。

第3論文は、本誌14号掲載「明治・大正期の大阪落語資料にみる罵りの助動詞について」で行われた考察を、新たに昭和初期の資料を加えて検証し直したものです。大阪方言における上向き/下向き待遇の助動詞の、強さと出現頻度の関係性について分析されています。

第4論文は、AI（人工知能）を扱った論文です。AIという新しい仲間を我々はどうのようにして「人間世界」に取り込もうとしているのでしょうか。AIの挙動を人間世界での有意味な挙動として読み取ろうとする、共同的な知的作業が発見されています。

実践報告「社会学者、ブレインアタックに遭遇」は、コロナ禍に脳内出血に見舞われた社会学者・櫻井芳生氏の、発症から現在の療養までの様子をご家族に綴っていただいたものです。遺伝子社会学を研究していた彼が今をどのように生きているか、ご家族がどのように今を受け止め支えているかを、看護師の日記等も交えて豊かに描いています。社会学的感覚は身体的なものとして社会学者に染みついています。その感覚は生を共にしてきた家族にも広がっていくのでしょうか。私自身の家族を見ていてもそう思う、今日この頃です。(H.Y.)

『現象と秩序』編集委員会（2022年度）

編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）

編集委員：樫田美雄（神戸市看護大学）、中塚朋子（就実大学）

編集幹事：川上陵哉（神戸市外国語大学）

編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第17号 2022年 10月31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 樫田研究室 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (樫田研), e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>